

# 夜汽車

尾崎放哉

青空文庫



「それで貴女あなたとう／＼離婚わかれてしまいましたので……丁度、昨年こぞの春の事で御座ごいました」  
 「まーとう／＼。ほんまに憎にくらしいのは其女あまの奴やつどすえなー、妾わたしなら死んでも其家を動ういてやりや致しやしませんで、」

あんまり今の女の声が高かつたので、思はずわれも其話わしの方に釣つり込まれた。

我は少し用事があつたので神戸の伯母さんの家へ、暑中休暇に成るとすぐから行つて居たのであつたが、ついで／＼長くなつたので有つた、処が此間大坂の我家わがやから、も一学校の始まるのも近ちか々／＼になつたのだから早く帰れと云ふて手紙が来たので仕方がなく帰る事にした。で、今朝けさ立つと云ふ処であつたのが、馴染なじみになつた姪めいや、従妹いとこに引とめられてしまつて、汽車に乗つたのはかれこれ晩の六時すぎでもあつたであらう、夜の故よるか乗客は割合に少ない、今朝手紙を出して置いたから家うちでも待つて居るであらう、此土産みやげを弟に出してやつた時、どんなに喜ぶであらう、など、考かんえて腰かけて居る内に今の女の大声に破やぶられたのであつた。

合あ憎いわれとは大分だいぶんはなれて居たのでよくは分らぬが、年は廿七、八まだ三十には成るまい、不絶しじゆう、点頭勝うつむきがちに、こちらに脊せを向むけて腰かけて居る、薄暗いランプの光に照され

て透すきとほ通るやうに白い襟えりあし足あしに乱れかゝつて居る後おくれば毛けが何となくさびしげで、其根ねのがつくりした銀杏いちやうがへ返しが時々慄ふるへて居るのは泣いてゐるのでもあるのか、これと向ひあい腰こしかけてゐるのが今大声おほこゑをだしたので、年は四十位に見えるが、其赤あから顔がほは酒さけを呑のむ証しるしなのであらう、見るから逞たくましそうな、そして其の袖口そでぐちの赤あかひのや、薄うす紅べにをさして居るのが一ひと層はいやらしく見える、が、一いつ更こうすましたもので、其そのだるい京きやう訛なまりを大声おほこゑで饒舌じやうぜつべつて居る、勿論もちろん絶たえず煙草たばこはすつて居るので。他の四五人の男の乗客じやくは大概たいていうつら／＼してゐる、やうである。

「それから貴女あなた神戸かたがはに腹はら更らりの兄あにが一人御座ごいますので、それに今では厄やつかい介かいになつて居るので御座ごいます」

「第一あたま貴女あなたが御ゆるいのだすえな、れつきとした女房にようばうで居やはつてな、そんな何処どこの馬うまの骨ほねだか牛うしの骨ほね見たやうな女あまに、何程なんぼ御亭ごてい主しゆが御好おすきぢや云いふたつて、自分じぶんから身を御ご引きやすと云ふ事が御ますか、ほんまに、……」

一人で怒をこつて、カン／＼と叩たたく煙管きせるの音ねも前まへよりは烈はげしくをぼへた。

「そして又またえらう心気しんきな御様子ごやうすでおますが、何処どこに御行おゆきやすのどすえ」  
暫しばらくしして忍しのび音ねに語かたり出したのは銀杏いんげい返かへしの女おんなである

「……………どをせ貴女……妾は泣きに生れて来たやうなもので御座います………それも妾の不運と存じては居りますが………まだ一しよで居りました時に信太郎と云ふ男の子が一人御座いましたので………丁度今年で六つで御座います、………それを貴女離嫁れる折に置いて行けと申しましたので、しかたなく置いて帰つたので御座います」

「まー御ぼんさん迄御有りやしたので」と又横槍を入れる、

「それが只一つ心残で御座いましたので、返ります折に隣りにそれはく親切な御婆さんが御座いましてそれに気を付けてもらうやうにたのんで置きました、私が帰りました当座は………毎日く私を尋ねて泣いて居たそうで御座います………」

後毛のぶるくくとふるえるのが見えた。

「御無理はありまへん、」

赤良顔もしばし煙管を置いてかなし気に見えた、噫何と云ふ薄命な女であらうと我も同情の涙に絶えなかつた、

「その御婆さんの処から今朝、貴女、信太郎が大病でむづかしいと云ふてよこしたので御座います………まー其時の私の心は………それで貴女、家に居た処で何事も手に付きは

しませず、家には一寸そこまでと云ふて置いて出て参たので御座います……………」

「まーそれで、御可憐さうなは信太郎とやら云ふ御子どすえな、大方其女に毎々ノ、いぢめられて居やはりなはつたでしやろ、妾の家の隣にも貴女継子がありましてな、ほんまに毎日くたゝかれて泣かぬ日はないのどすえ、」

「まーそうで御座いますか、」

心配そうに顔をあげて相手の赤良顔を眺めた、

赤良顔はあー悪い言を云つたと云ふ風であつたが

「なに貴女それ程でも有りませいで……………何でも聞いた程ではないものどす……………そー御心

配しやはると御子はんより貴女の方が御よはりどすえ」

と云つたものゝ猶氣の毒そうに眺めてゐた、

うす暗ひランプの光……………彼女のすゝり泣く声……………何と云ふ薄命な女であるか

と我は思はず溜息をついた、やがて汽車は止つた、

「大坂」※ 「大坂」※

駅夫の呼声も何となく沈んで聞えた、もー八時近くである、

乗客も皆出た、われも出た、彼女も出てゐる、

「御心配しなはらんのが……」

赤良顔は京都に返ると見えて窓から顔を出して 彼女と話しをしてゐる、

「はい有難う御座います」

やがて彼女は急ぎ足に歩んで行つた、赤良顔も窓から猶見送つてゐる、彼女はふりむいて  
點頭をした、われも思はず立つて彼女を見送つて居た、

「兄さん」

はつと思つて見ると弟である、今朝の手紙で下女と弟とがわれを迎ひに来て居たのであつ  
た、

「あ、帰つたよ」「御土産もたんとあるよ」

やがて弟の手を引いて三人で家路についた。

何処に行つたか先の女はもーそこらに見えぬ、

噫あはれなる彼女、よ

神よ、あはれなる信太郎を救ひ給へ。思はず吾は天にいのつたのであつた。

終





# 青空文庫情報

底本：「尾崎放哉全句集」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年2月10日第1刷発行

入力：蔣龍

校正：成宮佐知子

2013年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夜汽車

尾崎放哉

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>